

全国厚板シェアリング工業組合

切板の需要動向

(H25.6.20)

1. 切断量の推移

(成品切板出荷+賃加工)

(単位:千トン)

項目	24年度				25年度	
	1Q	2Q	3Q	4Q	1Q	2Q
	(実績)	(実績)	(実績)	(実績)	(事務局想定)	(事務局想定)
無規格	50 (2)	51 (3)	54 (3)	60 (3)	50 (3)	50 (3)
規格	447 (100)	399 (77)	378 (70)	345 (69)	390 (72)	420 (77)
合計	<b>497</b> (102)	<b>450</b> (80)	<b>432</b> (73)	<b>405</b> (72)	<b>440</b> (75)	<b>470</b> (80)

(出所)・実績は全国厚板シェアリング工業組合「鋼板流通調査」結果による。

・カッコ内の数値は賃加工量で内数。

【コメント】

- 24年度4Qの切断量(実績)は、前期比27千トン、6.2%減の**405千トン**と大幅に減少。  
これはリーマン・ショック直後の21年度2Q(406千トン)を下回る過去最低値である。
- 24年度合計(実績)：1784千トン(前年度2050千トン比▲266千トン、▲13.0%)  
リーマン・ショック直後の21年度(1776千トン)に匹敵する史上2番目の低水準。
- 1Q(想定)は、**440千トン**程度(前期比+8.6%、前年比▲11.5%)と想定。  
・4月140千トン(前月比+7.7%) + 5月(速報)147千トン(同4.8%) + 6月(想定)155千トン(同+5.4%) ≒440千トン  
・21年度1Q：435千トン、前期比▲10.7%、22年度1Q：494千トン、同+5.6%、23年度1Q：488千トン、同▲5.2%
- 2Q(想定)は、**470千トン**程度(前期比+6.8%、前年比+4.4%)と想定。  
・建設関連需要：前期比増加、建産機関連需要：同微増、その他：横ばいと想定。  
・24年度の期平均446千トン、月平均：149千トン。⇒25年度2Q月平均：157千トン  
・21年度2Q：406千トン、前期比▲6.7%、22年度2Q：531千トン、同+7.5%、  
23年度2Q：528千トン、同+8.2%、24年度2Q：450千トン、同▲9.3%

(参考) 切断量(成品切板出荷+賃加工)の前年同期比の推移

20年度1Q：+6.3%、 2Q：+6.6%、 3Q：▲3.3%、 4Q：▲24.8%  
 21年度1Q：▲34.1%、 2Q：▲37.9%、 3Q：▲25.0%、 4Q：▲4.0%  
 22年度1Q：+13.5%、 2Q：+26.3%、 3Q：+15.8%、 4Q：+10.1%  
 23年度1Q：▲1.1%、 2Q：▲0.5%、 3Q：▲5.6%、 4Q：+1.4%  
 24年度1Q：+1.7%、 2Q：▲14.7%、 3Q：▲16.8%、 4Q：▲22.4%  
 25年度1Q(推)：▲11.5% 2Q(推)：+4.4%

## 2. 業況

厚板シャア業界を取り巻く状況を概観すると、足元の需要環境は1～3月期の最悪な状態を脱し、新年度入り後は回復の胎動とともに、先行きへの期待が徐々に膨らみつつある。

すなわち、昨年夏場以降急減した建産機部門は、前回報告時点（3月）に比べると、円安を背景とする外需依存型機種を持ち直しに加え、排ガス規制や消費税導入前の駆け込み需要等の一時的要因も下支えとなり、堅調な分野・機種が広がっている。しかし生産拠点の海外シフト問題や駆け込み需要一巡後の反動減など懸念材料が多く、不透明感は依然残る。

一方、建設関連分野は、特に鉄骨建築は、物流倉庫・店舗に加え、遅れていた首都圏や名古屋地区の大型建築案件が始動しており、2Q～下期以降の着工本格化が見込まれている。また、橋梁も昨年度以上の入札量が見込まれるとともに、早期開札が期待されている。

今後の見通しについては、①建産機部門は、受注面で機種間の濃淡はあるものの、駆け込み需要や震災復興需要の継続、円安を追い風にした輸出増、堅調な設備投資動向等を勘案すると、全体としては当面底堅く推移するとみられること、②建築・橋梁分野についても、遅れていた一部の大型再開案件が着工を開始していること、橋梁は、昨年度案件の製作開始や大型補正予算等の執行が見込まれることから、期を追って回復するとみられる。

これに伴い、シャア加工量も、1Qは大底を打って増加基調に転じ、2Qは前年同期を上回るレベルまで復調すると予想される。

ちなみに、当組合が実施している月次統計「鋼板流通調査」で、「切板需給」状況をみると、昨年度2Q以降出荷減が止まらず、縮小の一途を辿っている。足元の需給は、依然緩和基調に変わりはないが、出荷量が緩慢ながら1月を底に4カ月連続で増加するなど、徐々に回復の兆しが出てきている。

5月（速報）統計では、仕入れ量183千ト（3カ月連続増）、出荷量174千ト（1月の147千トを底に4カ月連続増）、在庫量350千ト（3カ月連続増加）となり、この結果、在庫率は201%と前月比7ポイント低下した。

今後、需要（出荷）が増加し、需給の更なる引き締まりが期待される。

また、全国のシャア各社からの情勢報告を整理すると概要以下の通り。（6/7市場委員会）  
【北海道】鉄骨は、昨年発注された大型3物件（札幌三井JPビル、北海道新幹線函館車両基地、札幌競馬場）に加え、新幹線関連の車両基地、木古内・新函館駅舎などの着工が進み、H並びにMグレードファブは、夏ころまでフル稼働状態が続く模様。

一方橋梁は、24年度は前年比8割減と惨憺たる結果に終わったが、本年度は大型補正予算の計上等により、大幅な増加が予想される。

シャア各社はファブの高稼働に支えられて夏場頃まで高操業を維持する見込みである。

【東北】土木関連需要は、引き続き旺盛で堅調である。震災復興・防災対策・経済再生のための25年度当初予算（東北地整）は、前年度比11%増の総額7400億円超が計上され、河川・堤防・港湾などインフラ整備が今後さらに加速するとみられる。また被災地までの

復興支援道路である「三陸自動車道」延長による橋梁発注や、大型水門の設置が期待される。しかし建築鉄骨は依然低調である。

【関東】橋梁・鉄骨とも足元の状況は低調に推移している。特に1～3月のシャー加工量は過去最低レベルまで落ち込んだ。今後はファブ稼働が順次上向くと予想されることから、シャー加工量も最悪期を脱し、1Q以降増加基調に転ずると見込まれる。一方、建産機関連は、鉱山機械など一部機種を除き全体的には好転しつつある。しかしこれは排ガス規制や消費税導入前の駆け込み需要が下支え要因となっており、その反動減が危惧される。

【新潟】低迷していた公共工事の発注量は、増加傾向にある。鉄骨発注も新年度入り後順調な滑り出しを見せており、ファブは10月頃までの受注残を持ち、高稼働が続いている。建産機関連も緩やかな増勢を辿っている。

【東海】名古屋駅前の大型建築案件の着工は、少しずつ進んできているが、切板需要が出てきたという実感は未だない。母材値上げ分のユーザー転嫁は厳しく、板挟みの中で苦慮している状況。一方建産機の一部及び造船分野では、引き合いが徐々に回復しており、アベノミクス効果で、少しずつ変化が出てきている。

【大阪】5月の橋梁の入・開札は、NEXCO、国交省案件とも順調に進んでいる。これまでの受注は一部FABによる独占状態であったが、ここへきて専門ファブも受注し出している。この状況が続けば、前年度入札分で未発注案件の手配とともに、夏場以降の新規案件の発注が期待される。鉄骨は大型案件が乏しく、期待できない。

建機は、排ガス規制の猶予期間終了前の駆け込みや、北米向け輸出、震災復興需要等により、上期中は堅調に推移する見込み。

【九州】建築案件は、ようやく6～7月頃から動き出しつつあり、下期以降は病院・庁舎・物流倉庫を中心に更に増加するとみられる。また公共工事関連は、防災対策の河川改修・砂防事業やトンネル・橋梁工事の推進が期待される。建機関係は、足元底堅く推移。

次に、需要動向を概観すると、

- (1) 建設機械は、国内向けは堅調に推移しているが、中国向けや新興国向けを中心にウエイの大きい外需の不振が響き、全体では大幅に落ち込んでいる。機種別にみると、①主力の油圧ショベルは、4月統計までは輸出減によりマイナスが続いたが、ここへきて状況が一変。排ガス規制・消費税導入前の駆け込みと復興需要の本格化等を背景に、メーカー各社は中・小型機種を中心に増産体制に入っている。②建設用クレーンも、復興需要や公共工事の増加期待に加え、北米向けへの輸出回復等により、総じて堅調を継続している。③ダンプ・トレーラーは、10トクラスのダンプは、各メーカーともフル操業が続き、北米向け30～40トダンプの生産も急回復している。重機積載用トレーラーは、

絶好調が続く。

④重電関係は、火力発電関連が内外需ともに増加傾向にあり、具体的案件も目白押し状態である。⑤鉱山機械は相変わらず不振である。資源メジャーによる鉱山開発の減少・延期から、販売の低迷が続き、メーカーの生産調整は長期化の様相を呈している。

(2) 建設分野については、まず橋梁は、24年度入札量は、赤字国債の発行遅れや年末の衆院選挙の実施、設計工期を要するNEXCO案件のウエイト上昇等の影響から、当初予想を大きく下回り、過去最低規模の23万ト程度にとどまる見込みである。25年度は公共工事予算の増額、前年度の大型補正予算の執行により、24年度の入札量を上回る見通し(25万ト程度)である。しかし足元の開札ピッチの状況は、相変わらず遅れ気味であり、今後の切板需要の回復に向けて、早期発注が強く望まれるところである。

一方、建築鉄骨は、各地とも小型案件(病院、物流倉庫、店舗等)の鉄骨需要は旺盛で、Hグレード以下の中小ファブ稼働の繁忙が続いている。このため形鋼やコラムの伸びが大きい。一方、首都圏や名古屋地区を中心とする大型再開発案件も漸く着工が始まっており、Sファブの山積みは逐次増加するとみられる。工事の本格化は夏場～秋口以降と予想されることから、シャー加工量は、足元の緩やかな回復過程を経て、2Q以降、切板需要の更なる増加に繋がっていくと期待される。

(3) 一般店売り分野については、主要分野である中小建築に動意が見られるものの、受注は低調に推移している。各地区とも小ロット・短納期の商いが中心で荷動きは相変わらず閑散としており、60%前後の低操業を余儀なくされている。

次に、母材供給面については、国内のメーカー・ロールは、円高是正の動きを背景とした輸出契約の進展に加え、造船、建築土木、建機向けを中心とする内需増により、総じてタイト化しているようである。またミル各社は、内外需の増勢が続く中、設備の炉修や休止を計画していると伝えられる。

こうした状況下、各ミルは、年初より店売り向けを皮切りに、厚板価格の段階的値上げを相次いで発表している。今後とも、紐付き価格の進捗を含め、メーカーの価格対策から目が離せない状況にある。シャー業界としては、これら値上げ分を取引先にいかに転嫁していくかが喫緊の課題となっており、当分の間板挟み状態の中で苦慮することになる。

なお、シャー業界が抱える直近の課題は、以下の通りである。

- ①建設分野を中心とする需給ギャップ問題
- ②適正加工賃の確保
- ③母材価格引き上げに伴う価格転嫁問題
- ④与信管理、雇用対策(雇用助成金の申請、セーフティネット保証制度申請等)
- ⑤コンプライアンス対応(品質証明ガイドラインの普及促進、独禁法遵守、輸送条件問題、等)
- ⑥製造業の国内空洞化
- ⑦電力料金等コストアップ問題

### 3. 足元の主要需要部門の動き

#### (1) 橋梁・建築鉄骨の動向

##### 【全 体】

主力の建材分野は、鉄骨、橋梁ともにファブ稼働は低迷。昨年度4Q切断量は、過去最低レベルに落ち込んだ。新年度に入り、①橋梁の昨年度案件の製作開始や、②鉄骨では一部の大型再開発案件の着工により、加工量は増加基調に転じているが、規模は未だ低位にとどまっている。

今後の橋梁・鉄骨ファブ稼働は、昨年度開札案件や昨年度からの遅延物件の加工が開始されることから、逐次増加する見通しであり、シャー加工量も同様に増加基調に転ずる見通し。

2Q以降の橋梁開札には不透明な部分もあるが、年度下期以降は鉄骨分野向け中心にシャー加工量は堅調に推移すると期待される。

##### 【橋 梁】

24年度の橋梁入札量は、赤字国債の発行遅れや年末の衆院選挙等があり、過去最低レベルの23万トンにとどまる見込み。また入札されたものの、設計工期を要するNEXCO案件が多く（H24年度:80千ト、H24年度下期:36千ト）、首都圏の橋梁ファブの稼働は低位に推移している。シャー加工も低レベル。

新年度の入札量は、10数年ぶりの公共投資の増加や2月に成立した大型補正予算の繰越しにより、昨年度を上回る見通し。しかし開札ピッチは遅れ気味であり、入札にドライブがかかるにはまだ時間を要するとみられる。シャー加工量は、昨年度後半の開札案件が製作開始されていることから、増加に転じており、1Qはこの基調が継続する見込み。2Q以降の継続に向け、開札ドライブが期待される。

##### 【鉄 骨】

足元の状況は、物流倉庫やショッピングモール等の物件を中心に鉄骨需要は旺盛で、Hグレード以下のファブの稼働は堅調に推移している。このため、形鋼やコラム関連需要は伸びている。一方、昨年度から遅れていた首都圏の大型再開発案件も漸く着工され始めており、Sファブの山積みは逐次増加する見込みである。当面の繁忙期は下期からであるが、一部2Qに前倒しされるとの見方も出ている。また同案件は物件数も多く、来年度以降においても継続した高稼働が期待される。シャー加工量もSファブの山積みにも比例して増加する見込みであり、下期に向け順次増加する予定である。

#### (2) 建産機・重電・金属工作機械の動向

##### 【全体】

分野及び加工対象機種により受注状況にバラツキはあるが、全体感として好転している分野が前回（3月）報告時からみると漸増しているようである。一方で、増産の背景が排ガス規制や消費税増税前の駆け込みで、いわゆる需要の前倒しの要素が多いだけに、その後の反動減やそれに加えて需要家の海外強化による空洞化を考えると、先行きには不安を抱えていると言える。

## 【建設機械】

建設機械工業会発表の4月統計では、前年比9ヶ月連続でのマイナス。 内需は全般的に堅調で31.4%の大幅増となっているものの、外需は中国やその他新興国の不振が依然続いており、その影響で合計では▲16.4%の落ち込みとなった。

### ・油圧ショベル

4月の国内の販売は被災地向けも販売増に寄与し前年比でプラスになってはいるが、輸出の落ち込みにより合計では▲23.7%。 しかしながらこの統計資料の数字に反するが、この3月頃からは状況が一変している。 排ガス規制・消費税増税前の駆け込みと復興需要の本格化により、足元ユーザー各社の中・小型機種をメインにした増産で、関係シャシーの加工量は急速に回復してきている。概ね3～4割増。

### ・建設用クレーン

ラフテッククレーンは、駆け込み需要と復興需要に加えて公共工事の増加期待から販売が堅調。 また円高解消による輸出回復現象も見られ、需要家は強気の増産計画を立て、リーマン前の台数を超えるものとなっている。

クロークレーンは長期に亘る低迷の後、ようやく足元の生産は回復基調。 国内はラフテッククレーンと同様の理由で、また海外向けは円安による北米を主とする輸出の回復で需要家の生産レベルも漸増している。 さらに一部ではあるが海外調達部材が国内回帰している事もあり関係シャシーの加工は増加傾向にある模様。

## 【鉱山機械】

前回の報告内容とほとんど変化なし。 資源メジャーの投資激減に代表されるように鉱山開発の縮小・延期等から、鉱山機械は販売低迷が続いており、ユーザーの生産調整はまだまだ長期化しそうである。 機種としては大型・超大型ショベルや鉱山用ダンプ、大型トラクター等が該当するが、昨年比▲25%～▲40%と一律ではないものの大幅に落ち込んでいる。 重量物だけに関係シャシーの加工量は激減し、対応に苦慮している。

## 【重電】

足元は新規案件の加工が一段落し、加工量は低位での推移となっている模様。 今後については火力発電関連が内外需ともに増加傾向で、決定済や応札中の具体的案件が連なっており、ムード的にかなり良くなっている。しかしながら、これが関係シャシーの加工に結び付くかと言えば疑問符が付くのが悲しいところ。国内において競争入札への移行や、コスト面から部材の海外調達、またメーカーの火力発電分野での事業統合等々の要因から、どこで製作するか不透明であり、受注確定まで安心できない状態が続きそうである。

この円高解消で海外調達の一部でも国内回帰してくれるよう期待したいものである。

昇降機のエレベータは、昨年比で足元約▲10%程度。 建築関連がこれから本格的に動き出す、エレベータ設置は最終工程となるため、14年度以降での受注増に期待。

## 【板金・鍛圧機械】

鍛圧機械工業会発表の4月受注実績は、前年比で5ヶ月振りにプラスとなり、前月比でも3ヶ月連続増加となっている。 しかしながら、民間の設備投資はマイナスが続いており、統計上の増加もプレスの輸出増が寄与しているだけで、「力強さを感じるまでには至

っていない」(鍛圧機械工業会)。自動車向け大型プレスだけは堅調で、長期に亘り工程が埋まっている一方、中・小型の汎用プレスや板金機械は、受注そのものが不振であることや海外生産の比率向上等から、関係シャーの先行きの加工量確保については悲観的な見方が多い。

#### 【フォークリフト】

この業界は、1月～4月の生産・販売とも昨年比で▲10%程度落ち込み、先行きも低調に推移すると見ていたが、一部メーカーに限定される現象ではあるが、6月以降は3ヵ月程の期間で加工量がプラスに転ずるようである。年度を通してみると、ほぼ前年並みで、期初計画比でも微増になると見られているが、上方修正の要因は定かではないために、底を打ったと判断するまでには至らない状況である。

#### 【ダンプ・トレーラー】

10トンのダンプは各メーカーともフル操業が続いている。排ガス規制絡みの駆け込みと被災地向けの需要から、長期に亘り堅調さを持続している。また重機積載用トレーラーも絶好調で、この部門における加工量は確実に確保できそう。また北米向けの30トン・40トンダンプの生産が急回復しているが、これは排ガス規制前の作りだめが背景だけに、先行きの反動減が不安である。

#### 【産機・店売り】

全般に受注量の低迷、荷動きの停滞感が解消されない状態が続いている。結果、需要家に対する価格改定は難航し、一方素材は値上げ対象材の入荷が始まっており、板挟み状態という困難な局面がすでに本格化している。店売りマーケットの縮小が現実化している状況ではあるが、円安効果や公共投資増等々による夏場以降の好転期待ムードもあり、一日も早い末端実需の回復を願うばかりである

#### 【参考】 成品切板の最終用途比率 (平成23年3月出荷分。厚板シャー工組調べ)

・建築用:	34%	(37%)
・土木用(橋梁、鉄塔等):	14%	(17%)
・建産機用:	30%	(26%)
・輸送機用(船舶、自動車):	8%	(8%)
・重電用:	2%	(2%)
・その他(鉄道車両、容器、二次製品)	12%	(10%)

(注) カッコ内の数字は、21年3月時点の最終用途比率。

全国厚板シヤリング工業組合

シヤ業の厚中板在庫推移

(H25.6.20)

組合員の厚中板在庫推移(160社・6事業所／自社所有分)

(単位:千トン)

項目	24/6末	9月末	12月末	25/3末	6月末	9月末
	(実績)	(実績)	(実績)	(実績)	(事務局想定)	(事務局想定)
在庫量	343	348	338	325	340	330
前期比/量	▲17	5	▲10	▲13	15	▲10
在庫率	188.6	217.8	222.2	202.8	200.0	194.1

【コメント】

- 在庫量は、昨年6月末の343千トンをボトムに、建産機需要の急激な落ち込みにより、7月末以降増加を辿った。このため8月以降仕入れ調整場面が続き、この結果、今年3月末までは概ね減少傾向で推移した。しかし4月末は341千トン、5月末(速報)350千トンと再び増勢に転じている。
- 一方、在庫率は、昨年8月以降一貫して、200%を超えて推移している。特に12月～1月末は出荷の大幅な落ち込みにより、220～230%まで急上昇した。4月末は仕入れ量が増加したこともあって、208.4%へ上昇したが、5月末(速報)は201.1%と再び低下、今年に入って一進一退が続いている。
- 今後、シヤ各社が需要に見合った慎重な仕入れ姿勢を堅持すれば、在庫数量は、6月末340千トン、9月末330千トン程度まで調整されるとみられる。
- また在庫率は、仮に月間出荷量を17万トン前後で推移すると想定した場合、6月末は200%、9月末は194%程度と緩やかに改善すると推定される。
- 需要は、建設関連を中心に、底入れから、2Q以降期を追って回復傾向を増すものと期待される。しかしシヤ各社は、高止まっている足元の在庫動向には充分留意する必要があり、仕入れ及び在庫管理に関しては引続き細心な注意が求められる。

以上